ロープクライミング中の重大事故の傾向と対策について
フリークライミングインストラクターから見た私的見解と対策

長　門　敬　明（フリークライミングインストラクター協会）

最近、クライミング中のグランドフォール事故によく遭遇するようになってしまった。このような事態に対してインストラクターとして考えたことを論じていきたい。ただ、ここに書くことはごく当たり前のことかもしれない。もうすでに世の中に浸透した常識かもしれないが、今一度基本に立ち返る機会としてビレイの守るべき事項を再確認したい。これはゆるぎないビレイの本質であり、ここさえ守っていれば大きな間違いはないだろうと思われる。

ビレイの基本は以下の４か条が鉄則だろう。

① パートナー同士のダブルチェック
（ハーネスとロープの連結、ロープ末端の結び、ロープとビレイデバイスの正しい装着のチェック）
② 常にクライマーへ観察を怠らず、注意を払う
③ ビレイデバイスの正しい使い方と、ロープの末端側から制動手を放さない
（ロープの握り込みで止めるのではなく、ロープの角度で摩擦を最大限利用して止める）
④ クライマーの次の動きを予測し続けて、ビレイを行う

私はクライミングを始めて15年ほど、また今年でフリークライミングインストラクターの仕事を６年ほど携わってきた。フリークライミングインストラクターを生業として、インドアジム、外岩で、見てきたこと、聞いてきたこと、感じてきたことを軸にお話していきたい。そしてロープクライミング時の事故を私的見解で紐解き、事故の縮小にすこしでも役立てられたらと思っている。

なぜクライマーはビレイミスを起こしてしまうのか？文頭で述べたように、ビレイミスの一番の重大事故はグランドフォールである。正直あまり遭遇したくはないのだが、今年で２件身近な事故として見てしまった。話に聞いたのはその他にも数件。これが驚くことに、初心者同士のクライマーではなく、いわゆるベテランと言われる経験豊富な域にあるクライマーだった。それもクライマーのランナウトや判断ミス、クリップ時のたぐり落ち、地面が近い所でのフォールではないのだ。ましてや未熟なレベルのクライマー同士や、まだ年齢も若い人なら問題も容易に想像できるのだが、ベテランとなると「なぜ？？」となってしまわないだろうか？しかし、誰しも人間なので一瞬の気のゆるみがあることは否めない。気のゆるみなく、一生を送れるほど強靭な精神の持ち主がそう多い世の中ではないはずだ。ではなぜ、これほどまでに頻発したのだろうか？そこにはどんな原因があり、事故に至ったのか？そもそもビレイとは？基本に立ち返るいい機会だったので初心を思い出す気持ちで、個人的に改めて考えてみることにした。

ビレイするということは

まず、ビレイについて考えてみると、初めて自分

が教わったときのことを思い起こした。いわゆる山岳会の先輩にイロハを教わるわけだが、それがプロの指導でもないし、懇切丁寧に１から10までをしっかりとご享受していただいたわけではない。親切な先輩からビレイはこういったやり方でクライマーの墜落が止められるとか、しっかりロープを握って絶対制動手は離してはダメとか、ロープをたるませすぎると危険とか、指導側もレクチャーに慣れてるわけではないから、的確なアドバイスは無理な話である。要点を簡潔的に教わったのみであった。また、教わった本人も半信半疑のままクライミングを続ける訳だが、どこかで自分のビレイを見直す機会はなく、ただただ怪しいビレイテクニックを自分独自で磨いていくしかなかった気がする。無法者が野放し状態で世の中にくり出してるようなものだった気がする。今、インストラクター的にこの状況を振り返ると、当時は危なかったな～と感じるとともに、仕方のなかったことだと納得してしまう。多かれ少なかれ、世の中の新米クライマーのほとんどの方々と、私の初心者時のビレイテクニックと教わる土壌にそれほどの差はないように思う。クライマーの命を一手に預かるビレイヤー、言わば車の運転で他人を乗せている状況と似ているが、その手に他人の命が乗っかていると思うと責任は重大である。ビレイテクニックの習得に、車の免許制度のようなプロの教習官からレクチャーが受けられたらいいのだが、現状は身近な指導者の腕に左右されるしかないし、もっと劣悪な環境でビレイを教わるか、ほぼぶつけ本番でやる機会しかないクライマーもいるかも知れない。ここにも大きな問題はあるのだが、昨今も徐々に発展してきているクライミング業界なので、不安があるのであれば、今はプロのインストラクターやガイド、ジムのスクールで習うことがいい機会となるだろうし、利用して欲しい。しかし、こうして考えると普段何気なくしているビレイも、必然的にそのビレイさばきで重大事故の要因をはらんでいるのだと気付かされる。クライミングは登ることへの成果ばかりが表に出てくるが、確実なビレイが成功の裏にはあると忘れてはならない。

ロープのたるみ気味は、安全か？

ビレイする手には重みがある。最近の身近な事故を振り返るとベテラン、経験者ほど基本の重要さを忘れがちなような気もする。ではなぜグランドフォールは起きてしまったのか？その原因はなんなのか？要因となりそうなことをここで挙げていこうと思う。まずよく見かけるのはロープを必要以上にたるませ過ぎていること、そもそもクライマーを見ていない状態が多いビレイヤーも散見するし、ビレイデバイスから制動手を一時的に放してしまうか、もしくはしっかり握っていないこともありうる、またクライマーのロープたぐり落ち、クリップ飛ばし、など様々な要因が挙げられる。私が最近インストラクター的によく見かけるのは、ロープの出し具合がまず気になるところだ。まずビレイヤーの役目は、クライマーの墜落を安全な距離で制止させることだが、ロープの出し具合が必要以上にダラリンと感じられることが多い今日この頃では、安全な距離でクライマーをフォールから救えているのだろうか？はたから見ていると、クライマーの安全を気遣うより、クライマーの登りの邪魔にならないように、（大切なトライを集中して執り行えるようにという気遣い。）ロープのたるみが必要以上なことが多いと思う。ビレイヤーはクライマーが落ちた時にどうしようかと気を遣うべきだが、どちらかというとクライマーがストレスなく登れるようにと気を遣いすぎてはいないだろうか？それは実際ビレイヤーの手元のロープに余裕がないと、クライマーの早いクリップに対応できないから？？

これでは落ちた時に即座に墜落を止められはしないだろう。

また墜落時、突起物への激突などを考慮すれば墜落距離は最小限にすべきだし、同じようにクリップ時のクライマーの動きに合わせてロープを絶妙に出し入れすることも必要だ。そして最小限のビレイで止めると聞くとよく言われるのが、ビレイヤ―がロープを強く引き込み、クライマーの墜落を即座にキャッチすると衝撃があるから危険と勘違いされそうなのが、ガッツンビレイだ。実際、ガッツンビレイでのケガはよく聞く話であるから、ある程度の墜落の長さを確保するために大きく落とすことが正しいと思われがちだろう。でも落としすぎは距離がある分、大きな事故につながり易いし、グランドフォールにもつながってくる。ジムでは傾斜の強い壁も多く、ロングフォールもさせ易いが、その癖のまま外でも同じようにロングフォールを容認している節があるように感じてしまう。

時と場合によって絶妙な距離感で墜落距離を確保するのがビレイの基本で、墜落時に「まず、止めること」、落ちた瞬間のロックが基本だろう。また細かなところでビレイ器にもよるが、ATC などの確保器では通常通りにビレイしていたら多少は自然と流れるし、ロープの伸びも加わるので思ったほどのガッツンにはならない。(ブレーキアシスト機能のついた、グリグリ、クリックアップ、パイロットなどは多少のロープコントロールが必要。例えば、ビレイヤ―が荷重された際にちょっと腰を浮かすなどの対処が必要だろう。) あと、クライマー側も墜落時に安全な姿勢を維持するか、着地に備えて体勢を瞬時に整えることも必要だ。

ビレイヤ―の動きと危険判断

だがしかし、なぜこれほどまでにビレイヤ―のロープがたるみ気味の傾向になったのか？心情的には上に挙げたような心理的背景がありそうだが、現実問題として現場での状況から見て取れるのは、ビレイヤ―の「動き」と「視覚的判断能力の低下」にも問題がありそうに思える。まずは「ビレイヤ―の動き」についてだが、立ち位置が固定していることが多い。ビレイ中の動き（前後左右への移動）が少ない。それは不安定な岩場や、セルフビレイを取っているような状況でもないのに、インドアのジムでも両足をべったりと着けて初めの位置から動かないことがままある。動かないからクライマーのクリップに対応するため、ロープをたるみ気味で対処している感じに思えてならない。ここに大きな勘違いがあるようだ。基本たるみは取り、クライマーの動きやクリップに合わせて動くのが細やかなビレイワークにつながると思っている。手元だけのロープの引き込みや繰り出しの動きだけでビレイをするのではなく、前後左右の動きを補助的に取り入れ、適正な距離感で壁から離れたり近づいたりして、ロープのたるみを調整するビレイが正しいことだと私のスクールでは教えている。あと、クライマーが落ちた瞬間にすぐ反応する動きも重要だ。その瞬時に、ビレイデバイスをロックし、後方に下がるか、しゃがむなどの素早い動作の習慣づけが肝心。事故を振り返ると、この動きがビレイヤ―にはない気がしている。

また、クライマーの状況に判断や決断が追いついていないビレイヤ―が多いところも気になるところだ。ジム、外岩などでよく見るのが、Ｚクリップや、危険なクリップ飛ばしの時や、１Ｐ目のクリップをしてもたるみがあるロープ（グランドフォールしそうな距離感のところ)、ただ見ているだけのビレイヤ―になってしまっていることがある。それは何かを間違えたり、誤ったりしたことに気づかないで知

らんぷりしていると同じだろう。常にクライマーを見て注意を払うことは常識だし、クライマーの動きを予測してビレイヤ―は判断を下すべきだ。また、クライマーからの呼びかけだけに反応しているようでは遅いと言っていいかもしれない。この少しの遅れが、事故に達してしまうことも多々ある。

もちろんクライミング時に登っているのはクライマー本人であり、クライマーに起こったことの責任があるのだが、登る方も必死なので間違えることはよくあることだ。だからそこはビレイヤ―がフォローしてあげるべきだろう。Ｚクリップ時は指摘すべきだし、クリップ飛ばしもいき過ぎたら注意喚起するか、場合によってはそれ以上登らせない配慮は必要だ。一緒に登る以上はクライマーの命を預かるビレイヤ―が「安全管理者」なのだから、遠慮は捨てて対応すべきだ。ちなみにある調査では、４本目のクイックドローに到達するまで、クリップ時にグランドフォールするリスクがあるとしている。最低でもここまでは集中力を絶やさずにいるべきだろう。

クライマーは落ちる、そしてビレイヤ―はどうするか？

身近で起こったグランドフォール事故で直接的な原因は、ビレイヤ―の不注意による可能性が高かった。それはクライマーが落ちた時に、注意力が薄くて対処が間に合わなかったのだろう。慣れれば慣れるほどに、その行為に対して意識は薄れてくることは多い。だからベテランほどにそれは強い傾向にあると思われる。結果として注意散漫は思考の停止につながり、集中力を欠如させることが起こったのだろう。だから私のスクールでは「常にクライマーがどう落ちるかをイメージしてください。」と言っている。また、練習段階でいろいろな落ちるシチュエーション（降られて落ちる、ランナウトして落ちる、１ピン目で落ちる、など）でビレイをトレーニングすることがよい経験とイメージの糧となるようだ。思考の助けになる経験値を増やし、常にビレイ中はどうなるかをイメージする。

ビレイの基本は「ビレイヤ―の確かなテクニックと、フォール時にクライマーがどうなるかの想像力」が要となる。以上のことを踏まえて、当たり前のことではあるが明日もビレイに気を付けてクライミングを楽しみたいと、私は思っている。